

生涯で女性が何らかのがんと診断される確率は最新の2017年のデータで50・2%と半数を超えました。

がんは、男性に多い病気ですが、54歳までは女性の方に多いのが特徴の一つです。これは乳がん、子宮頸(けい)がんという女性特有のがんが若い世代に多いからです。

女性ホルモンの刺激で発症リスクが高くなる乳がんは、閉経直前の40代後半にピークがあります。妊娠から出産・授乳の生理が止まる期間は、この女性ホルモンによる乳がんの発症リスクが大きく減ります。子だくさんだった昔のお母さんたちには乳がんは少なかったわけです。

一方、子供を産まない女性

がん社会 を診る

中川 恵一



イラスト・中村 久美

がん対策に立ち上がる女性

女性が就労人口の半分に迫ろうとする現在、企業におけるがん対策が重要視されています。私が議長を務める厚生労働省委託事業「がん対策推進企業アクション」では、女性の経営幹部やリーダーが中心となり「Working RIBBON (Working Ribbon)」を立ち上げました。オフィシャルサポーターに

ネサンス取締役の望月美佐緒氏、アイスタイル取締役の山田メユミ氏、阪急阪神ホールディングスグループ開発室課長の下瀬陽子氏ら、約20人が就任しました。

私も交えたキックオフ会議では、長時間労働による発がんリスクの上昇、企業におけるヘルスリテラシー向上の必要性、テレワークを活用したがん患者の働き方改革、男性従業員の家族に向けた検診の啓発など、雇用者視点も取り入れた議論を実施しました。

も増えたことで、乳がんが急増、日本女性の9人に1人が発症しています。子宮頸がんは原因のほとんど100%が性交渉に伴うウイルス感染です。初交開始年齢の若年化や性の解放などに伴って、30代がピークです。20〜30歳代のがんの約8割は女性ですから、男性パートナーにも自分のこととしての理解が必要です。

今後、乳がん、子宮頸がんを軸に、女性のがんについて、予防と早期発見、就労支援の取り組みをしなやかに、力強く進めていきます。

nd L.P.ゼネラル・パートナーの村上由美子氏、ル

(東京大学特任教授)